



松姫車下がりの像（鶴巻橋）

松姫逃避行

戦国時代の甲斐の武将武田氏の滅亡後、信玄の娘松姫（幼名於松）は、幼い姪ほか三人を伴い、少人数の共を連れ厳冬の中逃避行の旅に出る。

幾つもの峠を越え、溪谷を渡り、時には山中での野宿や寺院を借りての旅であつたろう。衣食も足りず真冬の旅は、想像を絶する過酷なものであつたことが推察出来る。

約二ヶ月後、最後の難所陣馬山を越え、和田峠を下つて多摩郡恩方村関場に辿り着いた。案下山麓金照庵に身を隠しながら、心源院で修業し、その後横山村御所水に移住した。暮らしは困窮し、手習いや機織りで生活を支えた。

八王子の機織り技術は、松姫の指導によるところが大きいとされる。五十六歳の生涯は波乱万丈の一生であつた。松姫は今、信松院で静かな眠りについている。

戒名 信松院殿月峰永慧大禅定尼
姫の玉田院の墓は極楽寺に、他の二人の墓は不明である。

◇散歩のみどころ

陣馬街道バス停終点の陣馬高原下から和田峠へ、醍醐林道を下り夕焼け小焼けバス停までの約9kmの行程。バスを降りるとそこはセエノカミの行事を行う場所である。少し歩き福源寺へ。ここは、八王子に戦後まで続いた両墓制度が残っていた所である。つづら折りの道を和田峠へと登る途中で上案下の石仏、熊野神社を経て、峠の茶屋で小休止。

峠から醍醐林道を下りながら道俊屋敷跡、ばばあころがし、さらに醍醐川に沿って龍藏神社、龍泉寺へと歩く。龍泉寺の中興開基は、足利学校第十八代校長山室藤九郎の先祖である。そこから、江戸時代口留番所の関守をしていた尾崎、小川両家の長屋門を見て、松姫ゆかりの金照庵跡へ。次ぎに口留番所跡へと歩き、関場記と番所跡の石碑を見て、夕焼け小焼けバス停で解散。

①上案下のセエノカミ

八王子上恩方町（上案下）

市の無形民俗文化財となっているセエノカミは、全国的にみられる小正月に行われる火祭りの一つで、地域ごとに特色がある。

関西周辺では左義長。関東および中部周辺ではサイノカミ、セエノカミ、道祖神祭などと呼ばれている。また、メーダマ焼きなどと呼ばれる所もある。

上恩方町上案下では、行事をエセノカミと呼び、正月飾り等を円錐状にまとめたものである。

このセエノカミは陣馬高原下バス折り返し場に建てられる。以前は陣馬街道が上案下集落内で二股に分岐するセエノカミの地所と呼ばれる地点に立てられていたが、交通に支障が出るようになり現在の地に移されたという。

一月七日に各家から出された正月飾り等を集め、青竹やシュロ縄をつ

かつて地面に寝かせたまま束ねていく。先端は藁をあてがってその上からシュロ縄で巻き締め、疱瘡神の幣束をさす。

セエノカミを立てた後、白扇で作ったおてんとうさま、お月さまをそれぞれ東と西に、祭神の幣束を北側にさして完成する。一月十四日には倒して点火し、三叉になった梅の木にメーダマと呼ばれる団子を刺して焼いて食べ無病息災を祈る。

小正月の火祭りは市内各地で行われるが、上案下のセエノカミは伝統的な組織で運営し、特色ある形態を残しつつ伝承されており、地域の風俗習慣として貴重なことから、平成十七年、市の文化財に指定し保存伝承に努めている。

この神事は、神代の時代から続けられているとの説があるが、詳細は不明である。



上案下のセエノカミ作業風景



上案下のセエノカミ



今も使われている赤いポスト



上案下以前にセエノカミの神事が行われていた場所



入口にある六地藏ほか

② 永輪山福源寺

上恩方町（上案下）

宗派 臨済宗南禅寺派

開山 桃溪大和尚

開創 天文年間（一五三二〜五五）

集落への道を福源寺へと歩く。上恩方地区には埋墓と拝墓の両墓制が古くからあった。土地が狭く、墓域を有効利用した村人の生活の知恵といえる。今では個人墓域へと変わりつつあるが、古くからの慣習から抜け出すのは容易でないだろう。寺は明治中期以降無住寺で、峠の向こう側の同宗の龍泉寺の管理に任せている。



今もそのまま残っている半鐘



福源寺

●両墓制廃止の供養塔

福源寺と墓地の場所から更に登った山腹に、両墓制廃止建塔由来の五輪塔が建ち、次の様に刻まれている。「此の案下の地は昔より両墓制を行っておりました。近來各家の墓地を下に建てましたが、この地を永く守るように私共衆議を決し志を聚めて祖先の道念を厚く持ち此の地に眠る祖霊の為、塔墓を建立する者也

平成十年九月吉日

役員代表

山下喜雄

渡辺嘉平

小沢秀雄



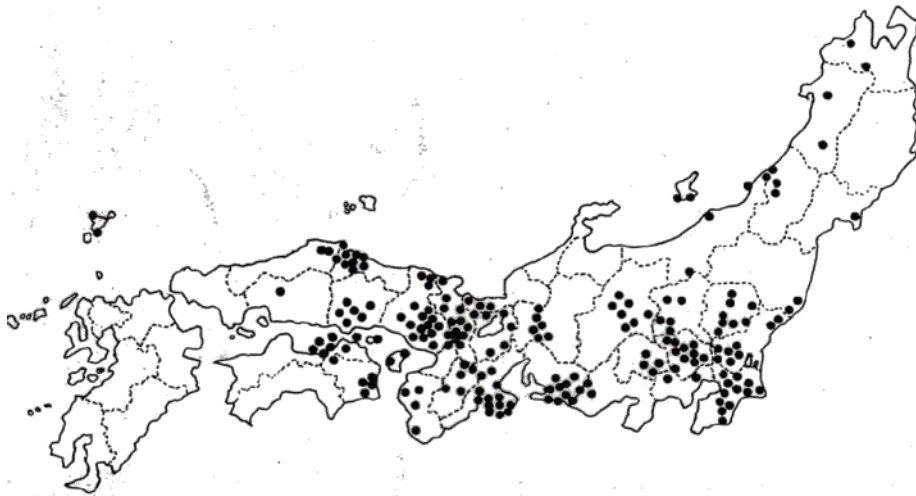
両墓制廃止の供養塔

●上案下の両墓制の画

この画は、大正六年地元で生まれ、市の郷土資料館に勤務していた渡辺嘉平氏が描いたもの。手前下は、乱塔場の立つ埋め墓であり、上はお墓と呼ぶ拝み墓である。当時の両墓制の様子がわかる画である。この習慣は、八王子では一番遅く戦後の初めまで続けられていたという。



両墓画

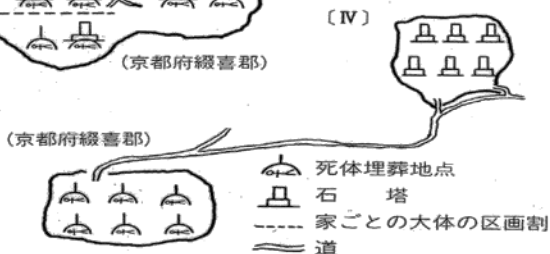
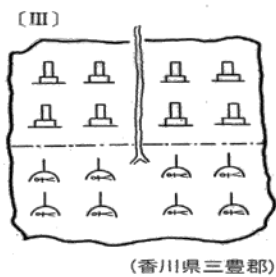
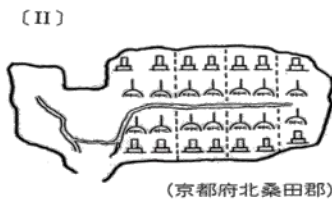
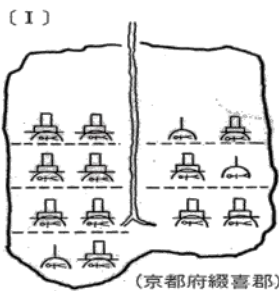


〔上〕 両墓制の分布
(佐藤米司氏による)



〔左〕 家型の墓上装置
(奈良県吉野郡)

〔下〕 墓地の類型 (新谷尚紀「両墓制についての基礎的考察」『日本民俗学』105号より)



 死体埋葬地点
 石塔
 家ごとの大体の区画割
 道

石塔を建てる型

- 〔I〕 死体埋葬地点の上
- 〔II〕 死体埋葬地点のそば
- 〔III〕 墓域全体が両区画に2分されており、死体埋葬地点からかなりの距離をおいている
- 〔IV〕 両墓域が隔絶しており、死体埋葬地点から著しく距離がある

【 葬 式 と 墓 】

今日、葬式といえば送る儀式とのみ考えられている。しかし、葬式には、死の前後における儀礼から入棺・通夜の儀礼、葬儀と野辺送り、さらには墓葬礼に至るすべての儀礼がふくまれる。順序としては、まず肉体から離れた死霊を一度肉体に帰そうとする儀式（たまよばい・枕飯・末期の水など）、ついで僧侶の引導に代表される肉体から離れた靈魂を分離させて位牌などに引き移す儀礼、そして分離した肉体と靈魂を墓地へ送付するという形で進められる。

葬法には、水葬・火葬・土葬のほか、野において鳥や獣に任せる林葬、さらには風葬（曝葬・洞窟葬）、死体保存（ミイラ）などの方法がある。洞窟葬は沖縄その他にみられ、ミイラは出羽三山のそれが有名である。今日は火葬が優勢であるが、かつては土葬による方法がより一般的であった。

土葬によって死者を埋葬する場合は、一七日・七七日あるいは一周忌というように、一定期間そこで儀礼が行われるが、墓づくりの儀礼も必ず行なわれ、目じるしの自然石その他が据えられる。この場合、墓上の装置をみると、土盛りや石積みの塚に自然石・生木・木製墓標などが立てられ、息つき竹・魔除けの鎌が添えられる。また雨除け・獣除けの家型や竹囲いがしつらえられ、花や膳などが供えられている。しかし、各地によりバリエーションが著しい。

一方、われわれになじみ深い石塔は、新たに付着された仏教的要素で、本来、追善供養のための塔にほかならず、近世以降普及したものである。死者の祀り方において、死者を葬った埋め墓でその霊を祀らず、別の場所（詣り墓）に霊だけを移し迎えて祀るというように、二重に墓をつくる両墓制が中央日本を中心に分布するが、自然石その他は埋め墓の、石塔は詣り墓の標識であることを意味する。



上案下の石仏

③ 上案下の石仏

陣馬高原下バス停から和田峠に向かつて歩くと、右側に石仏郡がある。左から二十三夜塔、馬頭観音、常夜灯、庚申塔、石地藏が建ち並んでいる。

④ 上案下 熊野神社

上恩方町（上案下）

祭神 伊奘那岐命

（いざなぎのみこと）

伊奘那册命

（いざなみのみこと）

大日靈命

（おおひるめのみこと）

旧格式 村社

別当寺 小沢氏持ち

例大祭 九月九日

上案下地区の人々によって祀られた祠。明徳二年（一三九二）小沢石見が多摩郡小沢荘より当地に入植した際、熊野本宮・熊野新宮・那智三山の分霊を遷し山頂に祀ったという。慶長年間（一五九六～一六一五）山火事により社殿を焼失。慶長十四年（一六〇九）現在地に遷された。石灯籠は享和二年（一八〇二）、安永五年（一七七六）、狛犬には明和八年（一七七二）の銘が刻まれている願主が阿吽別々で、阿像が落合八右衛門。

吽像は、小澤仁左衛門。



本 殿



熊野神社鳥

⑤ 和田峠

上恩方町上案下から藤野町佐野川の和田を超える峠。高さ六百八十八m。案下峠とも呼ばれている。この峠は、古くから武蔵と甲斐を結ぶ交通路として利用されていた。江戸期には、甲州裏街道と呼ばれ、恩方街道ともいわれていた。現在は、陣馬山の登山道路として利用される。



和田林道完成記念碑



和田峠の広場

⑥道俊屋敷跡

上恩方町（醍醐）

案下峠（和田峠）から醍醐道を少し行つた所に平坦な場所がある。この辺りが「どうしゅん屋敷」と呼ばれていた所らしい。一説には、道俊の名は別名定久であるというもの。屋敷跡から下つた醍醐川上流の溪谷に大岩という地名が残っている。岩はイシとも読むことから、大石定久の屋敷跡ではなかったかとの説もある。中世動乱の時代にはこの案下峠は国境の位置にあつたため、関所が設けられていたとされ、明らかに人工的な土塁に囲まれている。

また天正十年（一五八二）武田家滅亡の時、信玄の六女松姫がこの峠を越えて恩方の谷に身をひそめたという話が残っている。

上案下の渡辺逸平氏宅に所蔵されている元龜三年（一五七二）の信玄感状などから考えてこの峠が中世にもかなり重要な交通機能を持っていた

た事がうかがわれる。

江戸時代は、甲斐、相模、武蔵を結ぶ甲州街道の脇往還としての役割をしていた。別名「佐野川往還」とも呼ばれ、生産物や消費物の流通路であつた。甲州は、西原、網原、小伏、岩、相模からは、佐野川、沢井、小原、与瀬などの村や宿場から峠を越えて、恩方から八王子宿へと結ばれていたのである。こうした重要地点の峠であつたことから、何らかの「関場」があつたと考えられている。



道俊屋敷跡

●めしもり岩

上恩方町（醍醐）

中谷山尾根と醍醐道が交わる山腹に「めしもり岩」と呼ばれる岩がある。この下辺りの沢から流れ出る水源が醍醐川の源流のようである。

めしもり岩の名の由来は不明だが、この周辺の自然が、悪霊に汚されぬための厄難消滅、障害打破、靈障解脱、家運隆盛の祈りの場所であつたのではないかという。



めしもり岩

● 兎屋敷

上恩方町（醍醐）

めしもり岩から二十分程度醍醐道を下ると「兎屋敷」という地名の場所に出る。屋敷といえは家屋の敷地、家屋を構えた一区画の地、また武家屋敷の略というのが一般的だが、この山奥に兎と屋敷がどうしても結びつかない。とすると、兎という名字の屋敷跡か、動物の狩猟を生業とする何人かの縄張りの跡なのか、または暗号に使っていたのか不明である。



兎屋敷辺りの谷は深い

⑦ ばばあころがし

上恩方町（醍醐）

ばんばころがしともいわれている。醍醐谷のなかで一番切り立った目も眩むような溪谷がその場所と云われている。

昔、雪道に足を滑らせた比丘尼衆の老尼が谷に落ち死んだという伝説がある。天平からの古道は数多くの人達が災難にあったことを伝えている。しかし、六十歳をすぎた婆を谷底へ突き落とす「姥捨て」の伝説もまた根強く残っている。



ばばあころがし

⑧ 道標と龍神淵

上恩方町（醍醐）

醍醐林道のばばあころがしから暫く下ると、檜原村や臼木山に至るにく沢に出る。この三叉路の中央に自然石を削った小さな道標が立っている。「右 臼木山 左 佐の川 天保□□年」と彫られている。

この三叉路の下を流れる醍醐川を龍神淵と呼んでいる。醍醐谷でも奥まった所。土地の人たちは雨乞淵とも呼んでいる。上流を男淵、下流を女淵と分けているとか。淵に行っていたずらをする龍神が怒り大暴れするので慎むようにと言い伝えられている。また、民話、昔話には次のようなものがある。

- ・ある時、淵に若者が石を投げ込んで帰ったところ、鎮守の森に着いた頃ものすごい雷雨となり、数箇所に落雷があった。
- ・ある男が淵で汚れものを洗ったところ一日中淵が唸り続けた。

・女淵に乙姫さまが遊びにきた時、淵で顔を洗った岩があった。

・淵の木を伐ろうとした男が鉈をあやまって淵に落とし探していたところ、乙姫に木を伐つてはいけなさとされ鉈を返してくれたなど。

醍醐川の流れは、醍醐丸よりの沢水と、市歩地山（いっぽぢやま）の沢水とを源流として醍醐川に合流、関場に於いて案下川と合流し、さらに北浅川となる。



龍神淵付近の谷



道 標



右：にく沢林道（臼木山）
左：醍醐林道の分かれ道

⑨馬継ぎ石

うまつな

上恩方町（醍醐）

龍神淵から少し下った所の左側に民家がある。軒下に六十cm程の高さで一抱えもあるかと思う自然石が、少し間を空けて二基ある。「馬継ぎ石」といわれている。出入口は坂道になっているが、斜面をうまく利用し一階が馬小屋で二階が住居という家屋が今でも残っている。



馬継ぎ石がある茅葺屋根の家

⑩ いぼ地蔵・勝負地蔵

上恩方町（醍醐）

馬継ぎ石のある家の東側畑斜面入口に「立入禁止」の立札がある。その近くに、高さ五十cm程の自然石に童顔の愛らしい微笑みが線刻されている地蔵がある。

当時としては自然石などに彫刻する道具が一般的には普及しておらず、ノミの先を尖らせて彫ったもの。地元では、この地蔵を「いぼ地蔵」と呼んでいる。「正徳二壬辰九月吉日、



馬継ぎ石

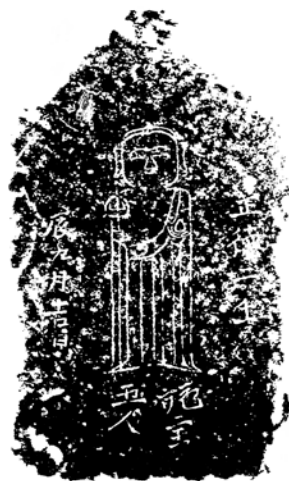
施主五人」とある。この年恩方地方に疫病が流行して多くの小児が死亡している事と関係があるという。五人とは、江戸期にこの付近に五軒の家が軒を連ねていたといわれている。また、いぼ地蔵の近くには子供を抱いた高さ五十cm程の地蔵と、三つの石碑が建っている。この地蔵も疫病と関係があるのではといわれている。別の名を勝負地蔵ともいわれているが、詳細は不明である。



いぼ地蔵



子供を抱いた地蔵ほか



線刻されているいぼ地蔵

⑪ 日東山西光寺跡

上恩方町（醍醐）

宗派 臨濟宗

開創 天文四年（一五三五）

醍醐の集落に入ると、右側台地に西光寺跡がある。風土記に「日東山と号す。臨濟宗村内龍泉寺末、石段十九段を登りて客殿あり」と。天文四年開創されたが、明治初年に廃寺となる。明治二十五年（一八九二）醍醐小学校となり、醍醐・振宿の子供のうち、一年生と二年生が通学していた。



西光寺跡



庚申塔 三十三夜塔

⑫ 振宿の龍藏神社

上恩方町（振宿）

旧格式 村社

別途寺 村民持ち

祭神 岩瀧姫命

創建年 不明

例大祭 八月十七日

醍醐川の乙女淵から右側の向こうに社殿が見える。龍藏神社である。

本殿は、寛文元年（一六六一）に名主山室次郎左衛門によって再建。新編武蔵風土起稿によれば、「神体船の帆柱に、龍の巻きし像なり。船の長さ二尺、帆柱も二尺、いずれも木にて作れる。石船龍藏とも云い村民の持ちなり」とご神体についての記述がある。振宿集落と醍醐集落の鎮守として、明治五年に住吉神社が合併され、一部の伝承としてかつては「豊玉姫命」が祀られていたという説がある。雨乞いと安産の神として崇敬されている。また、境内の石灯

龍二基は天明年間の造立。社前には二対の狛犬が鎮座している。一対は拝殿手前の石段脇の高い台座に祀られており、台座には昭和十五年と記されている。二対目は拝殿前に鎮座しており、小さな円筒型の胴をした狛犬。台座には寛政八年（一七九六）武州多摩郡恩方村講中と彫られている。現在、明治五年に竜蔵神社と合併した住吉神社は昭和五年頃、真峰嶺に移って現在に至っている。

また、醍醐林道の旧道を右へ入り少し行くと、路傍に二十三夜塔、さらに奥に三体の地藏と庚申塔が安置されている。



龍蔵神社



寛政 8(1796)年の銘がある二対の狛犬（拝殿前）



昭和 15 年と記された狛犬（石段脇の高い台座の上）



龍蔵神社

⑬ 龍蔵・住吉神社

上恩方町

祭神 岩滝姫命、底筒男命、中筒男命、上筒男命

例祭日 八月十七日。

創建年代は不詳。

上恩方町・醍醐地区、醍醐川に龍蔵橋という木橋が架かっている。橋を渡ると立派な鳥居が建っていて、その先が上がっていくと龍蔵神社の境内になる。

昔、神竜がこの石船山に降臨した所に社殿を造営したと伝えられ、神体は船の帆柱に竜の卷いた像で、一名石船龍蔵とも云う。龍蔵権現とも称されている。寛文元年（二六六一）に再建、明治五年（一八七二）住吉神社を合祀。雨乞いと安産の神として埼玉、群馬県辺りまで知られている。



石 仏



住吉神社



またぎ石

⑭またぎ石(堂山)

上恩方(森久保)

住吉神社から少し下った右側に富士山の形をした堂山という小山がある。その近くに「またぎ石」という高さ五十cmの自然石が建っている。子供が出来ない夫婦で、子供の欲しい女性がその石を跨ぐと不思議に子が授かったという。この風習は全国に広がっており、八王子市内でも神社や寺など数カ所に残っている。

⑮瑞雲山龍泉寺

上恩方町二五二七

宗派 臨済宗南禅寺派広園寺末

本尊 釋迦牟尼佛

寺宝 鉄仏聖觀音像

開山 僧瑞雲

開創 寛正五年(一四六四)

森久保橋を渡ってしばらく歩くと、右手に龍泉寺がある。弘治元年(一五五五)衰微した寺を山室氏が中興した。明治三十七年(一九〇四)便



古くから続く
「炭焼き三太郎」小屋

楼山三光寺、日東山西光寺を吸収合併して現在に至る。古くより上案下の福源寺同様に両墓制であったが、制度の廃止で墓域も整備されつつある。境内にある鉄製の聖観音菩薩は、鎌倉時代の作と推定され、像高は台座共三十七cmである。

本堂に向き合う形に観音像二基の立像、前庭には墓の遺物か、多くの供養塔が並列している。山室氏の墓域の真下に天神様の小祠が奉納されている。



龍泉寺

①6 山室藤九郎屋敷跡

上恩方町（森久保）

山室藤九郎屋敷は、足利学校第十八代校長（庠主）の山室青郊和尚と藤九郎が生まれ育った歴代山室家の本拠地のことである。この地区は冬の日の出が早く、水の便も比較的良好い地形で藤九郎屋敷を中心に、南東には醍醐川が回り込んで天然の堀をなしている。北東は谷川と切り立つ不動山に囲まれ、さらに南方の低い堂山は防寒を施した形跡もある。山の裏山に山室家の祖先が中興開基した龍泉寺が現存している。さら



鉄仏聖観音像

にその背後の裏山に「ほうじょう」と呼ぶこの集落の共有地の高い山がそびえている。

このような要衝の地に屋敷を構えていた山室家の勢力は大変なもので、没落する明治二十年（一八八七）頃までは、その屋敷内には一般の家は建てることができず、村人は醍醐川の南に幾つかの集落をつくって生活していた。例外として、龍藏神社に神官がいなかったことから大和の国より迎えたと伝えられる、神官の青木氏（屋号大和）と山室家を守るために分家である西垣戸（にしげいと）の山室家のみ家を建てることを許されていた。同じ分家の屋号（とちや）の山室家は新しい関係か、東の森久保橋付近に離れて居を構えた。なお龍泉寺東側に昭和五十二年青郊の顕彰碑が建立された。

延享元年（一七四四）上恩方森久保で山室直八の子として生まれ育った。藤九郎は、江戸中期以降三代に渡り藤九郎と名乗るため、人々は藤

九郎屋敷と呼ぶ。

明治二十三年（一八九〇）に廃墟となつて、残念ながら現在是在りし日の面影は消え失せた。裏口（鬼門）に秋葉様が祀られ、社前の灯籠が唯一の遺物。それと土手際に供養塔がある。隣接の瑞雲山龍泉寺は山室長定「平相国清盛之末流也」の中興開基。



青郊先生顕彰碑



替紋（三引両紋）



本紋（鎧蝶紋）

山室家の家紋



山室藤九郎家の墓所と参り墓

● 足利学校と藤九郎

上恩方（森久保）

栃木県足利市に平安時代初期創立といわれる足利学校がある。当時の最高学府（大学）といわれ、諸国より僧侶、武士、町人などの中世子弟教育の総合大学であつて、文化と学問の発展の中心的な役割を果たしていた。その学舎の第十八代校長に山室青郊和尚号成子（学徒名）こと、八王子森久保出の山室藤九郎が就任。史跡である足利学校の敷地内の墓碑に

「前住建長青郊和尚大禅師

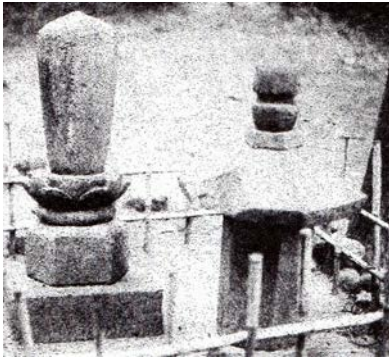
八王子森久保山室

文化庚午年十二月二十五日」

と刻されている。

足利学校資料によると、第十六代座主、道号を月光、法諱を元澄、別号を淳子と号す。郷里は武蔵八王子、年齢不詳。座在籍は三十一年と伝えられる。宝暦五年（一七五五）乙刻

(きのとい) 九月十一日死亡。享年不明。



足利学校敷地内にある
青郊先生墓碑



足利学校

⑪ 森久保橋

上恩方町(森久保)

関場を出て約八百m辺り、森久保橋が架かっている。昭和四十三年(一九六八)市道拡幅と共に竣工したもので、橋に架かる手前に、この地の名主一族であった山室家の分家がある。地元では「とちやー」と称されていると教えてくれた。古風さがまだ残っている土地柄である。



森久保橋

⑫ 関守両家の長屋門

口留番所に着く少し手前の、案下川(浅川)と醍醐川の合流地点近くに二家の長屋門が残っている。尾崎家と小川家である。両家は地元の有力者で、口留番所の検察や監視の関守役をしていたという。



尾崎家の長屋門

●尾崎日記

江戸時代に口留番所の関守を勤めた尾崎次郎衛門が書き記した、天保元年（一八三〇）から明治元年（一八六七）までの三十七年間の日記。内容は、天候や村内の出来事、それに社会的な事件など、貴重な資料が残っている。尾崎家の庭には、「なんじゃもんじゃ」の木がある。



小川家長屋門

⑬金峰山金昇（照）庵跡

上恩方町高留

宗派 臨済宗興慶寺末

本尊 阿弥陀如来

開山 一宗長道上人

開創 文明年間（一四六九〜八七）

以前

明治初年廃寺

天正十年（一五八二）武田氏滅亡により、信玄の息女松姫一行は逃避行の末この恩方に辿り着き、金照庵に滞在した。その後心源院に移った。なお、尾崎家西側裏の脇に、高さ七十cm程の「金照庵跡の碑」が建っている。碑には「金昇庵跡 是より北西百五十m 市立恩方第二小学校用地東端」と彫られている。さらに、口留番所内には、高さ二m、幅一mの「松姫之碑」が剣先形をした自然石に彫られている。



金照庵跡の碑



奥に見えるのが金照庵跡



松姫の碑（口止め番所内）

●松姫のおいたち

松姫は、永禄四年（一五六二）に古府中（今の甲府市）のつつじが崎の屋敷で生まれた。父親は戦国時代の武将の一人で甲斐の国（今の山梨県）を中心に活躍した武田信玄、母親は油川信友の娘で油川夫人と呼ばれた人である。

永禄十年（一五六七）十一月、松姫が七歳の時に織田信長の十一歳の長男信忠（幼名「奇妙丸」）と婚約。婚約のお祝い品は、帯や布地、織物、金・銀の細工物、虎やヒョウの毛皮など豪華な品々がやりとりされた。

この時代の身分の高い人たちの結婚は「政略結婚」といって、家同士の結びつきを強めるために、本人の意志と関係なく親が決めていた。結婚式まで相手の顔を見ない事もあった。この二人もまだ会ったことがなく、手紙のやりとりをして過ごしていた。

●かなしみ、そして旅立ち

元龜二年（一五七一）松姫が十一歳の時に母・油川夫人が亡くなり、翌年には武田家と織田家が敵・味方に分かれてしまったため、信忠との婚約が解消されてしまった。原因は、三方が原の合戦の時、織田の軍勢が武田と敵対していた徳川の軍勢に加勢したためである。

信忠との婚約が解消された松姫だが、兄・盛信に別の人との結婚をすすめられても決して受け入れようとはしなかった。松姫はまだ見ぬ信忠

を慕っていたのである。

さらに、天正元年（一五七三）四月には信玄が亡くなり、織田家は武田家を滅ぼそうと攻めるようになった。武田家が滅亡する天正十年（一五八二）一月下旬から三月下旬ごろ、松姫は高遠城で兄・盛信の三歳になる姫、新府城で兄・勝頼の四歳になる姫、人質として預かっていた小田田信茂の養女の四歳になる姫の三人と少人数の供をつれて逃げなくてはならなかった。

高遠城（長野県高遠）から始まり

↓新府城（山梨県韮崎）

↓入名寺（甲府市）

↓開桃寺（今の海島寺・塩山市）

↓向嶽寺（塩山市）

↓金照庵（上恩方町）という古寺

まで、幼い姫たちを連れ、そしていつ敵に見つかるともしれない旅は、精神的にも肉体的にも大変なものであった。

六月二日、本能寺の変が起こり、武田家を滅ぼした織田信長・信忠が

亡くなった。その年の秋、金照庵から心源院（八王子市下恩方町）に移り、髪を切つて、尼になり、信忠をはじめ、武田家一族の人たちの冥福を祈つた。

尼になって名前が「松姫」から「信松尼」に変わった。松姫、二十二歳のこと。信松尼の「信」は、信忠の妻であるという意味が込められていたという。

●信松尼と信松院

心源院で八年間の修行をつみ、天正十八年（一五九〇）の秋、御所水の里（今の台町）のあばら家に移り住んだ。尼としての生活を送りながら、十一・十二歳になった三人の姫たちを育てるため、朝から晩まで働いたという。収入は寺子屋で近所の子供たちに読み書きを教えたり、織物を作ることから得ていた。もちろん、織物はカイコを育て、糸をつぐ

むことから始まる。これらの松姫の織り方が、八王子の織物のもととなったとも伝えられている。

また、かつて武田信玄につかえていた大久保長安は、松姫が八王子にしていることを知り、彼女のためにりっぱな草庵（今の信松院がある場所）を贈った。元和二年（一六一六）松姫は五十六歳で亡くなるが、生前の願いがかない、この草庵はお寺にされ、「信松院」と名付けられた。

このお寺には、戦前まで松姫が植えた松（八王子に入る前の案下峠で見つけた松）が境内にあったが、昭和二十年（一九四五）八月の太平洋戦争の時に本堂とともに焼けてしまった。このほか、松姫のお墓、江戸時代のなかごろに作られた木造の松姫坐像、純和風木造の軍船模型がある。

境内には布袋様が祀っており、毎年一月の一日から十五日まで八王子七福神巡りの一つとしてにぎわう。また、毎年七月十日には「ほおず

き市」がおこなわれ、夏の風物詩になっている。

●ト山上人

（心源院当山六世髓翁舜悦禅師）

ト山上人は、赤ん坊のとき、山入りの奥の根に捨てられていた。大声を出して泣いていたところを坊様に拾われ、心源院に預けられた。その後、頭を丸め小僧として育ち立派な僧侶となる。

「寺は、財産があつてはいけない。小さい事はとがめない」。ある時、小僧が襖を逆さに張り間違えてしまった。ト山上人は、「よいよい」と言つて咎めだてせず、魔除けになるからと逆さに張った襖を一枚だけひっくりかえしにのいたそうだ。

ト山上人は、百二十歳まで生きたと云われている。「長寿は天運なり、天運は母なり」と言い、沢山の弟子を育てた。そして修行で足の裏は鉄

板のようだったという。

八王子へ逃れてきた松姫を保護するため、ト山上人は、徳川幕府へ嘆願書を出す、家康はそれを咎めた。すると和尚は「徳川家康とは、一体誰ぞ」と問うた。家康は、「自分は征夷大將軍であり、一番偉い人間だ」と説明しようとしたが声がでない。そして答えられない。

その時、家康はハッと思い「松姫は誰ぞ」と聞くことと同じだと気づく。家康はト山上人の偉大さを知り、松姫をト山上人に託したという。これは有名な話である。

信松院、興岳寺、雲龍寺、宗関寺等開山する。永正四年（一五〇七）丁卯二月五日誕。寛永三年（一六二六）丙寅十月二十六日遷。

②〇高留の口留番所跡

上恩方町（高留）

案下道（陣馬街道）は、甲州街道を追分で分岐し、横川で元八王子城山へ向かう道と分岐する。ここから佐野川への道を辿るのが、古案下道と呼ばれ、戦国時代から甲州への最短路として栄えた。

北条氏は、甲州口警備のため、案下峠（和田峠）上に、番所を設置したといわれ、徳川幕府もこれを継承し、後に「高留」に移し、「口留番所」として旅人の検察、物資の流出を監視した。武蔵名勝図絵によると、門並びに番所があつて柵を構え、土地の人はここを「関場」とよんでいたという。安政元年（一八五四）頃の文書に「下番百姓三拾六人隔日に相勤め」とあり費用は村持ちであつたことがわかる。「関所跡」と書かれた石柱の両脇には、「関場記」という碑が建っている。

陣馬街道は今、全て舗装され車の

往来も多いが、昭和三十五・六年頃まで関場から上は、砂利道であつた。



関場関所跡



関 場



関 場 記



口止め番所の想像図 渡辺嘉平画

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・八王子事典
- ・八王子市史
- ・武蔵名所図絵
- ・八王子地名考
- ・歴史散歩辞典
- ・民族探訪辞典
- ・八王子寺院めぐり
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・恩方すこし昔の話 秋間健郎著
- ・恩方の歴史を知る会 坂本昭二著
- ・八王子発見 中島善弥著
- ・藤九郎屋敷と上恩方の歴史 榎本要助著
- ・続夕焼けの里 植松森一著
- ・八王子観光エリアマップおんがた
- ・多摩のふるさと
- ・絵で見る村の生活史 渡辺嘉平著
- ・恩方村の伝説 塩田真八著
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社地図
- ・八王子市地図

・八王子市観光マップ